

陳統が砦に着いた時、雪華は石勇に抱えられて小屋の前にいた。その隣には、公孫勝と平真もいる。

「姉ちゃん、準備が整ったよ」

陳統が告げた。

「そうか。それで、水の量はどのくらいだ」

訊いたのは公孫勝だった。

「かなりの量だよ。李逵の小父さんは、砦の端じゃなくて林の中に避難するようになって言ってたよ」

「その方がいいだろう。大きな木に抱きついた方が安全だな」

公孫勝の言葉に、雪華が不安そうな表情になった。

「公孫勝様、それだけの水なら、禁軍の兵士は……」

公孫勝は、雪華の顔から目を逸らした。

「兵士達に大きな犠牲が出るのでは」

雪華が続けた。公孫勝は答えなかった。

「戦で兵が死ぬことは分かっています。でもこれでは、あまりに多くの兵が」

「宋雪華殿、彼我の戦力の差を埋めるには、このくらいのことをしなくてはならぬ。それでも、勝つまでには至らない。だが、戦意を挫くことは出来る」

公孫勝はそう言ったが、どことなく苦しそうではあった。

「公孫勝様」

雪華が真剣な目で公孫勝を見つめている。

「禁軍兵士に恨みはありません。兵士は上官の命令に従っているだけでしよう。確かに戦ではありません。個と個が戦って、敗れて果てるのなら、それも仕方がないと言えましょう。ですが、これはあまりに酷い」

雪華が声を詰まらせた。

「こうでもしなければ、禁軍は退きません」

「本当にそうでしょうか。こうして、平真様はここにおられます。経略使様の意を受けてです。わたしは、希望があると思うのです。話し合えば、どこか分かり合えるところが出て来る。そう感じるのです」

公孫勝の目に、迷いの色が浮かんでいた。平真は、何か言いたそうにしていたが、雪華の真剣な目を見て、思いとどまったようだった。

「黒死軍のような者達であれば、話など通じるとは思いません。ですが、平真様をわたし達の助けによこした経略使様なら、話が通じないとは思えないのです」

「話は必ず通じます。経略使様は、ものの道理が分からぬ方ではありません」

思い切ったように平真が言った。ほとんど叫びに近かった。

「李逵殿と宋家村の者達の苦労は」

公孫勝が言った。

「水は落とします。ですが、その前に」

雪華が平真を見た。

「平真様、経略使様にお伝えください。すぐに林の中に兵を避難させるようにと」

平真は雪華の目を見つめた。

「よいのですか、それで。もちろん、私はそうしたい。ですがこれは、皆さんにとっては、最後の武器と言ってもいいのでは」

雪華は静かに頷いた。

「これは賭けだとは思いますが、ですが、こんな不毛な戦を、いつまでも続けていいとは思いません。そして、これ以上の死者を出したくもありません。わたし達の側からも、禁軍の側からも」

雪華の言葉を聞いて、公孫勝が諦めたように首を振った。

「宋雪華殿の想いを変えることは出来なさそうだ。いいでしょう。宋雪華殿の言うようにしてみましよう。駄目なら駄目で、また何か考えればよい」

公孫勝は、残念そうに言ったが、どことなくほっとした表情をしていた。公孫勝にとっても、大量殺戮は気が進まないものだった。「平真様、さあ早く。いつ不測の事態が起きて、堰が破れるかもしれません」

雪華は平真を促した。

「宋雪華殿、感謝します」

そう言い残して、平真は三の木戸を駆け下りて行った。

平真の後姿を見詰めながら、公孫勝が言った。

「では、禁軍の避難が終わりましたら、鏡で合図を送ります」

小屋の中から、黄玉と曹瑛が出て来た。必要な物をまとめ終えたのか、二人は結構な荷物を担いでいる。

「姉様、話は聞きました」

黄玉だった。

「あなたは納得出来ないかもしれないけど、わたしには、こうするより他なかったの」

「いえ、わたしは反対ではありません。不必要な殺生は、わたしも嫌いです」

曹瑛も頷いていた。

「よかった。少なくともあなた達は同意してくれるのね」

ふたりが同時に頷いた。

「おい。俺はもう避難していいか」

小屋の中から、晁蓋の声が聞こえた。

「俺は素早く動くことが出来ねえ。水に呑み込まれたくないしな」

「さっさと林の中に行けよ」

陳統が、呆れたように言った。

「晁蓋、おまえ。少しでも長く、雪華姉ちゃんの小屋にいたかったんだらう」

陳統は、小馬鹿にするように晁蓋に言った。

「陳統、おまえ歳下のくせに。この野郎」

晁蓋が飛びかかろうとしたが、傷の痛みで蹲るしかなかった。

「無理しない、無理しない。おまえがよく戦ったことは認めてやるから、さっさと林の中に入んな」

「くそう。傷が治ったら……憶えているよ」

「はいはい、傷が治ったらね」

雪華が、二人のやりとりで呆れた顔をしている。

「何を言い合ってるの、二人とも。馬鹿なことを言ってる暇はないわ。

陳統、あなたは早く陳達様や聞起に報せなさい」

雪華に急かされて、陳統は慌てて一の木戸目指して弦月を走らせた。

「よく似た二人だ」

黄玉がぼつりと言った。晁蓋が黄玉を睨んだが、逆に睨み返されてそっぽを向いた。

「この鉄面女が」

晁蓋が小声で罵った。

「何か言ったか」

黄玉に言われて、晁蓋が足を引きずりながら林に向かう。

雪華と曹瑛が、顔を見合わせて笑った。二人の笑い声が、緊張を孕んだ戦場に場違いなほど楽しい響き渡った。つられて公孫勝も笑っている。戦の終わりは近い。小屋の中で、一人九天玄女は感じていた。

・
・
・

隊伍を崩さずにいる砦の兵を見ながら、杜愔は右手に持った大刀を振った。左右の騎兵が少しずつ前進した。杜愔が直接指揮する歩兵本隊を、まだ動かす気はなかった。正面でこの圧力に耐えているのは、東汾山の賊の頭領、陳達という男だろう。その左には、見事な駿馬に乗った若者がいる。宋家党の一人、聞起という若者だろう。遼にいと聞いていた。流星錘を鮮やかに遣うが、馬の扱いが天才的だとも聞いている。いずれにしても、宋家党の主要人物の一人であることは間違いない。

陳達の右手にいる若者に見覚えはなかった。錦の戦袍を着込み、槍を握っている姿には、どことなく初々しいものが感じられる。これが初陣なのかもしれない。だが、その顔に緊張は見られなかった。意外と豪胆な性格なのかもしれない。その三人がしっかりと、十倍以上の禁軍の圧力を受け止めていた。

杜愔は、後ろで歩兵と騎兵の混成部隊の指揮を執っていた興仁貴を呼び寄せた。

「見事なものだな。これだけの兵を前に、少しも怯えておらん」

杜愔は本当に感心しているようだった。

「全滅してもいい。そう思っているのでしょうか」

興仁貴が答えた。

「分からん。だが、死のうというふうにも見えぬ。何かな。初めの頃に比べると、余裕のようなものが感じられる」

「兵は、かなり減ってはいますが」

「そうだな、少なく見積もっても三分の一は減っておるな」

「それ以上に重要なことが、満たされつつあると」

「宋雪華かな。黒死軍は完全に失敗したようだな」

「平真が……」

「それは分からん。平真の所在は、儂にも分からん」

左右の騎兵は、一の木戸を挟み込むような態勢になっている。それでも、正面の陳達たちに動揺は見られなかった。犠牲を避けるためには、木戸の中に入ればよさそうなのに、相変わらず木戸の手前に兵を並べている。

「何かを待っているのでしょうか」

興仁貴は不安そうだった。興仁貴が不安がるのも、分からないではない。これまでさんざん、罨や妙な兵器に悩まされたのだ。砦を守っている者達が、まともにぶつかり合うことだけをするとはいえ難かった。

「今度は何を企んでおるのか」

杜愔は、半ば楽しそうに呟いていた。

「経略使様、そんな心待ちするようにおっしゃらないでください」

「そうだな、兵の命がかかっておるからな」

「私が前に出ます。経略使様は、後方で」

興仁貴が、無理にでもという口調で言った。

「何を言う。決戦の時に、総大将が後ろに引っ込んでいてどうする」

「ですが、経略使様に何かありましたら」

「何があるというのだ」

「それは分かりません。ですが、経略使様は、この河東路かとうろになくてもならない方、いえ、この国にとっても」

「儂わがごとき一人や二人いなくなっても、何ほどのこともあるまい。儂の代わりなど、興仁貴、おまえがすればいいのだ」

「お戯たむれを。ここは、私に任せてください」

興仁貴は真剣な目をしている。それを頼もしく思いながらも、杜愔はつつぱねた。

「これは、あの者達への礼儀だ。そうは思わぬか」

杜愔の強い言葉に、興仁貴は返す言葉を失くしていた。

その時だった。砦の兵達の真ん中が割れて、陳達と何か話した後、一人の男が駆けて来るのが見えた。

「あれは、平真……」

興仁貴が、驚いたように言った。

「確かに平真だな」

杜愔も認めた。

「何事でしょう。とりあえず、平真が無事なのは分かりましたが」

興仁貴は安心したように言った。それなりに、平真の安否あんびを心配していたようだ。

息を荒げて、平真が杜愔の馬前に駆けつけた。

「どうした平真」

杜愔が訊いた。

暫く息を整えた後、平真は杜愔に拝礼した。

「経略使様、直ちに兵を左右の林の中に」

いきなり平真が言った。

「どういうことだ。なぜ、林の中に」

杜愔は不思議そうな顔をした。興仁貴も、訝しそうに平真を見詰めている。

「水です。砦の上に塘があり、そこに堰を造り、一気に水を落とすということです」

平真が一気に話した。さすがに、杜愔の顔色が変わった。

「水……か」

砦前の広場は、緩い播り鉢状になっている。水が来ると、一気に広場を襲って下へ続く山道に流れ込む。広場に展開している兵達のことを思うと、杜愔は冷や汗が出る想いに駆られた。

「それを、なぜおまえが」

杜愔は、そう問い返すのがやっとだった。

「宋雪華殿が、報せよと」

「宋雪華が……」

唸ったのは、興仁貴だった。

「分かった。平真、よく報せてくれた」

「私ではありません。宋雪華殿が」

「そうだな。それで、黒死軍は」

「大半が討ち取られました。隊長は、黄玉という女剣士に」

「あ奴が討たれたと。信じられん。不気味ではあったが、相当の腕だったはずだ」

「間違いありません。私が間近で見えました」

「そうか。おまえが無事だっただけでも幸いだ。兵を避難させることにしよう」

杜愔が興仁貴に、兵の避難を命じた。興仁貴は、素早く兵をまとめて林の中に誘導した。砦の兵達は、いつの間にか姿を消している。

山道の向こうから斥候兵が一騎、杜愔に向かって大声で叫びながら駆けて来た。

「経略使様、開封府禁軍が」

斥候兵の叫びに、杜愔が怒鳴った。

「もう遅い。おまえも、早く林の中に」

杜愔の言葉に斥候兵は一瞬戸惑ったようだったが、すぐに林の中に馬を入れた。

開封府禁軍が来たか。だが、もう報せるだけの時はない。

「全員、木にしがみつけ。砦を背にして、流されないようにせよ」

杜愔は、大声で指示を出した。

砦の上から、地を揺るような低い音が響いて来たのは、まさにその時だった。

信じられないほどの水しぶきが、砦の上を覆っていた。直後に、地鳴りのような音が、山全体に響き渡った。

三の木戸で一旦勢いを弱めた水は、木戸を乗り越えたと今まで以上の勢いを得て、二の木戸、一の木戸を滝のように落ちて来た。

「来るぞ」

誰かが叫んだ。

杜愔は、木を抱えている腕に力を込めた。重い甲冑を着けているだけに、軽装の兵よりも流されやすい。

「来たぞ」

飛沫が先に、顔を打った。次に、強烈な圧力が全身を襲った。

「うぬう」

杜愔は、両足を踏ん張らせた。間断なく、水が身体を押し流そうとしてきた。その圧力に、両腕が引きちぎられそうに感じられた。

「いつ終わる」

杜愔は呟いた。苦しげな呟きだった。馬は林のずっと奥まで逃げている。兵達はそれぞれだった。だが、声がないところをみると、流された兵はいないようだった。

徐々に、水の圧力が弱まっているのが分かった。杜愔は、ようやく辺りを見回す余裕を持った。

「経略使様、お怪我は」

興仁貴の叫び声が聞こえてきた。

「大事な。兵達はどうか」

小隊長達が、自分の兵達を確認しだした。

「大丈夫です。流された者はおりません」

あちこちから声が上がった。

杜愔は、木から離れて林を後にした。

凄まじい泥濘ぬみだった。残っている水は僅かなものだったが、乾いた土は、一瞬にして泥の海に変わっている。

「これはまた……。」

杜愔は言葉が出なかった。

兵達が、次々に林の中から飛び出して来た。興仁貴も水を滴たらせながら、林から出て来た。

「凄まじい水でありました。平真が報せてくれなければ、どれだけの兵が流されたことか」

興仁貴の顔は蒼あおざめている。

杜愔が、泥田のように変貌した広場を見つめていた。

「ふっふっふっ」

突然、杜愔が笑い声を上げた。訝いぶしげに、興仁貴が杜愔を見た。

「見事だ、宋雪華。そして、宋家党よ。儂の完敗だ」

杜愔はそう言って、興仁貴を振り返った。

「そう思わぬか。これだけの罍を仕掛けて、なおかつ儂らを助けおつた。胸のすくような負け方だ」

「はあ」

興仁貴には、もう戦う気力も残されていなかった。ただ、避難していなかった時の惨状を想像すると、身の毛のよだつ想いに駆られるだけだった。

水の通った跡あとが、ずっと下の山道にまで続いている。まるで、巨大な龍が通り過ぎた後みたいだ。興仁貴はぼんやりと、そんなことを思っていた。

•
•
•

かなりの量の水だった。砦へと続く山道から流れて来た。

「これは、一体」

杜遷は、思わず声を漏らしていた。水の勢いはそれほどでもない。山道までは、かなりの勢いを保っていたと思われたが、麓からは水が広がって、急速にその勢いを失くしたようだった。

「砦の上に、水を溜めた池でもあったのかな」

独り言のように、杜遷が呟いた。

「頭、これは池を決壊させたようですね」

部下が言った。

「そうだな、ここでこれだけの量ということは、上では相当なものだったろう」

杜遷は唸った。開封府禁軍の邪魔をするために、ここまで来た。信頼出来る快達、およそ五百とともにだった。禁軍を止めることが出来るとは思っていない。だが、峽の意地を見せたかった。これまで、これといった援護をしてこなかったことへの、せめてもの償いという想いがあるのかもしれない。いざとなれば自分一人でも、禁軍将校を道連れにしてやる。杜遷は、そう覚悟を決めていた。

「奴ら、先に行つたんだな」

「間違いありやせん。見張りの者がそう言っております」

山道の入り口に、見張りの者を置いていた。杜遷が入り口に来た時、既に開封府禁軍は山道を登った後だった。間に合わないとは思わなかった。まだ半刻も経っていない。水は、膝より上にはならなかった。今はほとんど引いていて、地面がぬかるんで歩き難いという程度だ。

「さあ、行こうぜ」

杜遷が快達を励ました。

暫く山道を登ると、兵士達の死体が見うけられるようになった。鞍を乗せた馬が、興奮したように暴れているのも見えた。

「水でやられたんでしょね」

部下が言った。

「ああ、水に流されて、木や岩にぶつかったんだろう。馬に乗ってた奴なんかは、かなり危なかったと思うぜ」

杜遷が答えた。そう言われてみると、死体の多くは、首が奇妙な方向を向いている。外傷はあまり見られない。

「重い甲冑を着込んでる奴ほど、こうなりやすいということかな」

杜遷が投げやりに言った。馬の死体は数えるほどしかなかった。俠達は禁軍兵士の死体を横目に、山道を駆け登って行った。

・
・
・

水の勢いは凄まじいものだった。雪華は石勇にかかえられながら、その恐ろしいまでの水の落下を見続けていた。三の木戸で一度流れを止めた水は、上から落ち続ける水で溢れ出すと、一気に二の木戸、一の木戸を流れ落ちて行った。それは、滝のような瀑布となって砦前の広場をなめ尽くした。上の塘に、よくこれほどまでの水があったものだど、不思議に思うほどの水量だった。

「石勇、これは大変なものね」

雪華が呟いた。

「こんなに水があるとは思いませんでした」

石勇も、呆然と水の流れた跡を見つめている。

幸い、砦の上の林に水は来なかった。黄玉も曹瑛も、水に濡れずに林から飛び出して来た。公孫勝と陳統も出て来た。

「公孫勝様、ここまでの水とは……」

雪華の言葉に、公孫勝もしきりに首を振っていた。

「私もここまでは想像しなかった。塘の水の半分ほども流れたのだろうか。李逵殿も、思い切ったことをする」

「天殺の星なら、このくらいはする」

いつの間にか、九天玄女が林から出て来ていた。

「いやあ、凄かったよ。びびりそうだった」

陳統が楽しそうに叫んだ。

「姉様。禁軍を避難させてよかったですと思います。まともにあの水に呑まれたら、想像もつかないような被害が出ていたでしょう」

黄玉だった。

「これでよかったんだわ。兵士にも家族がいる。恨みもないのに、こんなことで命を奪ったら、終わりのない憎しみが生まれるだけ。姉さんもわたし達も、そんなこと望んでないわ」

曹瑛が、強い口調で言った。

「そうね。曹瑛の言う通り、これでよかったんだと思う。李達にはわたしから言うわ。せっかくの苦労を無駄にしたけど、わたしはこうしたかったんだって」

雪華が言い終えるやいなや、砦の上から、李達を先頭にして二百人ほどの村人が駆け下りて来た。

「嬢さん、怪我は」

息を荒げて、李達が訊いてきた。

「大丈夫、水は林にまで来なかったわ。でも下の方は、林にも水が入ったわ。幸い、流された兵士はいないみたいだけど」

「兵が林に……」

「李達、ごめんなさい。わたしが禁軍の兵士に教えたの。林の中に避難するように」

李達は、暫く考え込んでいた。

「わたしの独断でしたことなの。皆は関係ないわ」

雪華が済まなそうに言った。怒鳴られるのは仕方がない。そんな顔で李達を見つめている。

「嬢さん。皆苦勞したんだが、してしまったことは仕方がない。それより、これからどうする気です。こちらにはもう、決定的な手はない」

「わたしが出ます。そして、話しかけてみます」

李達だけでなく、公孫勝までも驚いた顔をした。

「話とは……」

李達が言葉を詰まらせた。

「呼びかけです。もう、こんな馬鹿馬鹿しい争いは止めたって」

雪華の目は真剣だった。

「それは、戦のはじめに考えたことだが……」

公孫勝も言葉を詰まらせている。それがうまくいきそうだったら、とづくにしていたと公孫勝は思った。だが、と公孫勝は考え直した。あの時は、雪華がそれを出来る状況ではなかった。自分か李逵が、説得するしかなかった。それでは、到底説得出来そうにはない。しかし、雪華なら。公孫勝は、幽かに希望のようなものを感じた。

「雪華殿、してみたらどうだろうか。もし駄目でも、これ以上不利になるということはない」

雪華の顔がほころんだ。

「やってみます」

「まあ、公孫勝殿がそう言うなら」

不承不承、李逵も同意した。

「李逵。失敗しても、失うものはないわ。黄玉、曹瑛、来て」

雪華は石勇に目で合図した。石勇は何も言わず、雪華をかかえたまま一の木戸の方に歩いて行った。黄玉と曹瑛が、それを護るように左右についた。李逵達もその後ろを追った。

一の木戸の上から見ると、味方も禁軍も隊伍を組み直していた。先頭には陳達、その左には聞起、右には楊林がいる。その後ろに、董超と薛霸がひかえている。東汾山勢全員が、燃えるような気を放っている。

雪華は、石勇に抱えられたまま門の上、最も広場から見やすい場所に移った。左に黄玉、右には曹瑛がつき従っていた。

雪華の場所からは、禁軍全体が一望出来た。最前列の美しい甲冑に身を包んでいるのが、経略使だろうと雪華は思った。静かで理知的な目だと思った。この人なら、呼びかけても無駄にはならない。そんな思いが雪華を勇気づけた。

「太原府禁軍の皆さん」

勇気を奮って、雪華が口を開いた。

「わたしは宋江。皆さんの知っている宋雪華という名は、外に対して

は捨てました。どうして、父の名を使わなくてはならなかったか、今、その理由を語ります」

雪華の声は、大きくもないのに、山の中でよく通った。

誰もが、雪華を見つめている。味方も敵も、誰一人として声を上げる者はいない。雨上がりのような澄んだ空気の中で、一人雪華の声だけが響いていた。

「わたし達の村は、三歳前に遼兵に襲われて大きな被害を出しました。わたしの父をはじめ、ここにいる者達の家族も殺されました。そして村自体も、ひどく荒らされてしまいました。残されたわたし達は、村を立て直すために、交易の道を選びました。時が経つにつれて、交易は次第に広がり、村を立て直すことが出来るようになりました。多少の財を蓄えることも出来ました。ですがそれは、不当に利を貪ったり、取引相手に過度の負担をかけて得たものではありません。わたしは、交易において、何ら恥じることはしていません。出来るだけ利を少なくして、民が求めやすいようにしたつもりです。取引相手は確かに選びました。ただそれは、わたしを含めた民のためにしたことです。不当な利をつけて売らないか、民に売り惜しんで、より高く売れそうなところに転売しないか。そんなことを確かめていたのです」

禁軍兵の中から、頷く者が現れた。次第にそれは広がっていき、さうだと声を上げる者も出だした。

いきなり矢が飛んで来た。二本だった。素早く黄玉が動いた。抜き放った剣が、矢を一本斬り落とした。曹瑛が続けざまに矢を放った。前列にいた二人の禁軍兵が、肩を射抜かれていた。黄玉が雪華を振り返った。雪華は無事で、石勇の右肩に矢が立っていた。雪華を庇って射られたのか。黄玉はそう思った。

「黙って聞けい」

石勇が大喝した。一人の將軍らしき男が、矢を射た兵士のところに馬を走らせた。ものも言わず、二人を殴り倒した。

「宋江殿、申しわけない。私は都監の興仁貴という。この不調法者達は、責任を持って後で処断する。経略使様も望んでいる。話を続け

てくれ」

興仁貴と名乗った男は、そう言って目で詫びていた。経略使の隣で、平真がほっとした顔をしているのが見えた。

「宋雪華よ、済まなかった。続けてくれ」

言ったのは、杜愔だった。

「わたし達は、そうして三歳続けてきました。権場での税や手続きは、定められた通りにしてきました。ただ、役人や仲買人への賄賂や返礼などは、一切してきませんでした。それをすれば、確かに交易はしやすくなります。ですがその賄賂も、結局は物の値に上乘せされ、求める者の負担になります。わたし達の相手は、多くは民草です。値が高くなれば、購うことが出来なくなる者が多いのです。だからわたしは、出来る限り物の動きを簡便にして、経る人の手を少なくしました。そして、必要な物を必要などころへと、物の流れも単純にしました。多くは、人ではなく村との交易というかたちになりました。その方が、運ぶにも無駄がなく、わたし達にとっても都合がよかったからです。そして、交易のために最も重要だったのが情報でした。ここにいる戴宋、柴進が遼で、宋清が西夏で、蒋敬が太原府で、それぞれ情報を集め、物の集散を調整しました」

雪華は、わざと変えた後の名を使った。それによって、もう元には戻れないのだということ、自分にも言い聞かせるためだった。

「わたし達は、禁制の銅貨や塩には手を染めていません。茶や絹は扱っていましたが、これを扱っていない商人はおりません。遼はもちろん、宋でもこれを取り締まっていけないことは、経略使様ならよく御存知のはずです。このわたし達の交易を奪おうとしたのが魯權でした。そして、それに加担したのが知府の黄文柄です。わたしは、黄文柄に騙されて太原府に呼ばれ、そこで思い出されたくもない仕打ちを受けました。魯權は遼との交易を譲れと迫り、黄文柄は遼の侵入を手引きしていると責めました。確かにわたしは遼の將軍と会いました」

おお、と禁軍兵がどよめくのが分かった。そのどよめきのなかで、雪華の声だけが、染み入るように兵達の心に響いていった。

「ですが、この方は既に遼の將軍とは言えません。名は明かせませんし、話の内容を述べることも出来ませんが、決して宋にとって不利なことではありません。これは、信じていただくしかありません。わたしの命にかけて、宋を脅かすというものではありません」

信じるぞ、そういう声が、禁軍兵士の間から次々と上がった。

「わたしは、その將軍の考えに同調しました。虐げられている者達の開放。それが同調した理由です。翻つて、この国はどうでしょうか。大きな城郭は栄えています。わたしは開封府のことは知りませんが、この太原府だけを見ても、豊かで活気があり、そして戦もありません。ですが一歩城郭を出ると、小さな村や荘では、その日の食べ物にも困る人々で溢れています。そのことは、皆さんもよくご存知のはずです。まして国境に近い村では、遼の侵入や賊による略奪に苦しめられています。わたし達の村、宋家村のようなどころは、決して珍しいものではありません。本来それらから守ってくれるはずの軍は、こうした村や荘には何もしてくれません。苛斂誅求とも言えるほど絞り上げられ、あげくのはてには見捨てられる、そんな民草の気持ちを理解されているのでしょうか。この国は病んでいます。そして、この国の為政者は腐っています」

誰一人として、声を上げる者はいなかった。ただ、雪華の透き通った声だけが山の中にこだましていた。

「この国には、自らを天子と呼ぶ帝がいます。どうして天の子なのでしょう。本当に天の子ならば、人ではない様なことが出来るはずですが、わたし達には伝わることは人とは思えないことばかりです。それも、決して人として上等とは思えないことばかりです。国の財政が逼迫していることは、わたしのよう田舎娘にさえ分かります。それが、軍の維持や役人への支出であることも知っています。軍はあるべきですし役人が必要なことも分かります。問題はその数と中身です。戦えない兵と冗官が、多すぎるのです。そのために経費が嵩み、遼や西夏に対する歳幣が、さらに国を圧迫しています。それなのに、帝は自らの欲望にまかせて、浪費を繰り返しています。書画骨董

だけでは飽き足らず、太湖石※を運んだり、昆嶽※を宮城に造ったりと、およそ政とは無縁のことばかりに熱中しています。そして、政は蔡京を中心とした一部の為政者が壟断しています。そこに、民のためという視点は見られません」

※太湖石 太湖に産する奇岩。かなり大きく、運ぶのに船団を要した。

この船団を花石綱と言った。

※昆嶽 宮城東北に造られた人工の山。大きな庭園となっていて、

珍鳥奇獣を集めた贅沢なもの。

禁軍兵は、俯く者が多かった。自分達のことも指摘されている。そういう表情だった。雪華は続けた。

「為政者は、帝のためにあるものではありません。軍も、帝や役人のためにあるではありません。為政者は民の希望のために、軍は民の安寧のためにあるべきです。この国は、それが全く逆になっています。人が暮らしていくために必要な物を、一体誰が産しているのでしょうか。帝や役人でしょうか。それとも軍でしょうか。民あつての国。帝と役人、そして軍だけで、どうして国が成り立つのでしょうか。わたしは難しいことは分かりません。ですが、こんな単純なことを見ようとしないうちに為政者は不必要というより害悪です。それは帝も同じです。百歩譲って、どうしても帝を必要とするなら、それは民を害する者ではなく、民を善導する資質を持った者であるべきです。今の徽宗帝に、はたしてその資質があるのでしょうか。今の為政者に、その気概があるのでしょうか」

雪華は語り続けた。いつしか雪華は、言おうと思っていなかったことまで、口に出していた。これが、わたしの心の底に溜めていた思いなんだ。語りながら、雪華は自分自身でも驚いていた。

「民も、自助の努力をしなければなりません。何から何まで国に頼ることは、国だけではなく民自身をも滅ぼします。民が自ら努力して、為政者がそれを援け、軍は安全を保証する。そうすれば、民も国も富みます。富を否定してはいけません。問題は、富が偏在することなのです。額に汗して働いた者が、その労苦を報われず、賄賂をほしいまま

まにする役人や、富を独り占めにしたい大商人だけが富み栄えていく。これが、本当の富と言えるでしょうか。そして、それを許している国に、未来というものがあるのでしょうか。国というものは、民にとつて重い枷かせなだけなのではないでしょうか

そうだと言う声が、禁軍兵の中から上がった。それは、漣さざなみのように兵達の間を伝わり、やがて、広場に響くほどの大きな声になっていた。

「為政者は、民の暮らしやすいように知恵を絞る。軍は、民が安心して働けるように護る。そして、民は自らの、そして他の者の幸せのために働く。それが、青臭い理想にすぎないことはよく分かっています。そんなこと、実現するはずがない。そう言われることも分かっています。ですが、そうありたい、そうしたいという夢を捨て去ってまでの、何の人生なのでしょうか。人は、食べる物がなければ命を失います。希望がなければ、生きる意味を失います。少なくともこの二つ。この二つがなければ、人は、本当に生きているとは言えないのではないのでしょうか。そして、そのどちらか一つでも、今のこの国にはあるのでしょうか」

雪華は続けた。

「この国は老いてきています。老いてあちこちに縦たてびが出て来ているのに、それに気付こうともしていません。柱が腐りかけてきているのに、それを交換しようともせず、ただ、木を添えて治ったかのようにごまかしている。わたしには、そんなようにしか見えません。人も国も、歳を経れば老いていきます。それは仕方のないことだと思えます。ただ、どのように老いるかは選択出来ます。注意し、努力すればうまく老いることも可能です。その逆に、醜く老いることもあります。人も国も、それは、心がけ次第で変えることの出来るものだと思います。この国は、考えることすら放棄しているように思えます。老いて若い頃のような体力を失くしているのに、若い頃と同じように遊び呆ぼろけている。実際、この国の富の大部分は、軍の維持と、遼、西夏に対する歳幣さいへいに消えてしまいます。残りは、役人や帝の消費するところとなり

ます。民間の富は、そのほとんどが、大商人や官戸、形勢戸が独占しています。そこに、民という視点はありません。さきほども言いましたが、富そのものが悪いわけではありません。富の、異常な偏在が問題なのです。帝の贅沢にしても、それに対して正当な対価が支払われていれば、民も潤います。ですが現実には、ほとんど無償で民は駆り出されています。太湖石を運んだ花石綱しかり、昆嶽の造成しかりです。それ以前に、民は兩税※をはじめ多くの税に苦しめられています。さらに労役が課せられるのです。しかも、帝の贅沢を維持することが難しくなると、直ちに塩や茶の税を上げて、民から搾り取ろうとします。酒税などもかなりのものです。昨年施行された限田免役法※も、結局は民が苦しんだだけでした。官戸や形勢戸は、役人に賄賂を贈りこれから逃れています。馬鹿を見るのは、いつも民ばかりです」

※兩税 夏と秋の二期に納める税。土地の畝ごとにかげられた。

※限田免役法 官戸の免役を一定限度の田地に限り、

それ以上の田地には民と同じ負担を求めた法。

禁軍兵士の目は真剣だった。食い入るように雪華を見つめ、頷く者も少なくなかった。

「わたしは、この国に希望を見ることを止めました。もう、治癒することが不可能なまでに、この国は病んでいます。希望は、新しい国に託すしかないと思います。もちろん、新しい国が出来れば、古い国の富は減ります。富を創り出す民が減るのですから。ですが、これまでが間違っていたのです。富を創り出さない者が、富を得ていたのです。それを糺すための新しい国です。哀しいことに、新しい国もやがては老いていきます。それは人と同じです。どんなに清新な理想も、時を経ることによって老いていきます。よく老いればいいのですが、そうでないこともあります。崇高な目標が、いつしか民を縛る教条に墮すこともあります。わたしは、国が清新でいられるのは、人と同じ五十歳が限度だと思います。それ以上になると、やはり権力は腐敗しやすくなります。その後、また新しい国を作り直すのです。何が間違っていたのか、何が足りなかったのか、そして、何を残していくべきか、

それらをよく検討した上で、民の総意のもとで新しい国を創りはじめるのです。けして一握りの者の欲や、武力で創ってはなりません。これは、わたしの夢です。叶うことのない妄想かもしれません。多くの人は笑い飛ばすかもしれませんが、夢を捨て去ってまで生きる人生に、どれほどの意味があるのでしょうか。夢を見てはいけないという世に、どれほどの喜びがあるのでしょうか。わたしは、けなされても、馬鹿にされてもいい。それでも、夢を抱くことは捨てません。明日はきつとよくなる。そう信じて眠りに就くことの出来る世。わたしは、そんな世を夢見ています」

雪華はそこで語り終えた。水を打ったように、静寂が広場を支配していた。禁軍兵士の頬が濡れていた。幾人もの頬が濡れていた。

雪華はすでに、石勇にかかええられてはいなかった。自らの足で、一の木戸にしつかりと立っていた。雪華は、ただ広場の兵士を見ていた。春の淡い青空を見ていた。木々の萌え出す若葉を見ていた。それらも、そして隣に立つ弟妹さえ、雪華には新鮮に感じられた。これまでの心の蟻^{むら}りが、少しずつ晴れていくような、そんな爽やかな気持ちになっていた。

石勇は、涙を流していた。幼い頃の苦しい思い出は、今、石勇の心の中で、かけがえのない試練に変わっていた。俺が変わるために、あの苦しみは必要だったんだ。そう思えた時、石勇の心が光で満たされた。俺も捜していく、雪華姉ちゃんについて。石勇の心は、限らない平穩に包まれていた。

黄玉は嬉しかった。姉様が立ち上がってくれた。石勇の肩に立った矢を抜き、血止めをしながら、黄玉は心の中で呟いた。姉様は、この世に絶対必要な人。わたしは姉様を守り抜く。どんなことがあっても守り抜く。黄玉は、限らない喜びの中にいた。

曹瑛は涙を浮かべていた。長く苦しい戦いが続いた。その中で自分は、傷付き汚^{よご}されてもきた。だが今、その辛い^{つら}い想いも報われた。姉さんが心を決めた。それだけで報われた。自分の運命^{運命}は大きく変わった。皆の運命もだ。この新たな運命の中で、わたしは逃げずに戦う。曹瑛

の心に、新たな決意が生まれつつあった。

これが……これが宋雪華。公孫勝は感嘆していた。まさに天魁の星。玄女様の目に狂いはなかった。公孫勝はそう思った。そして、自分に残された時の短さを思った。だが、私は生きねばならぬ。この娘の力とならねばならぬ。この娘の夢、それは、私の夢と重なるではないか。公孫勝の胸に、不屈の闘志が湧き上がってきた。

李逵は満足だった。これが嬢さんだ。これこそ嬢さんだ。儂が命を託した嬢さんだ。嬢さんを汚してはならない。嬢さんのためなら、儂は鬼にも魔物にもなる。何と言うこともない。結局、儂は天殺の星だな。玄女様は正しかったということか。李逵は、溢れるほどの満足感に浸っていた。

聞起は驚いていた。姉ちゃんが立った。ついに、姉ちゃんが立ってくれた。遼、そして宋でも、人の醜さを見続けてきた。時には、人というものに絶望しかけたこともあった。だがそんな時、いつも心のかで姉ちゃんが語りかけてくれた。姉ちゃん、俺、これからも頑張るよ。姉ちゃんの役に立つように努力するよ。聞起は、そう心に誓った。

陳統は戸惑っていた。姉ちゃんが立ち上がってくれたのは嬉しい。でも、姉ちゃんが遠くなっていく気もする。俺はついていけるだろうか。陳統は不安だった。石勇だって変わった。俺も負けずに頑張らなくちゃ。いつまでも、姉ちゃんに頼ってばかりじゃ駄目だ。俺は、姉ちゃんに頼られるようにならなくちゃ。そう思う陳統の心には、やはり微かな不安が残っていた。

陳達は爽快な気分浸っていた。心の優しい、美しい娘だと思っていた。だが、それだけではなかった。俺は、とんでもない娘に惚れたらしい。陳達は自嘲した。だが、心は不思議に軽やかだった。手の届かない花を愛しむ。そんな気持ちだった。さあ、俺もやってやろうじゃないか。陳達の心は、軽やかに舞い上がった。

時遷は心を震わせていた。間諜として、感情を殺して任務を遂行することに慣れていた。だが、今のこの昂ぶりを押さえ込むことは出来なかった。素晴らしい娘達だと思った。雄々しい若者達だと思った。

一人一人が能力を發揮し、それが連携し何倍もの力になっていた。今、その理由が分かった。宋雪華という核があったからなのだ。私も力になりたい。時遷の心はまだ震えていた。

楊林は心を打たれていた。宋家村復興の話聞いてから、宋家党に心を奪われていた。憧れ続けてきた。出来ることなら、宋家党に加わりたかった。それが、父を通じて実現した。父は、それを喜んでくれた。何かの縁。そう思っていた。望んでも叶わないことの多い世で、自分は幸せなのだと感謝した。この素晴らしい仲間達のために、自分は懸命に努力しよう。楊林は、幸せを噛みしめると共に、気持ちを引き締めなければと心を励ました。

雪華は、ただ広場を眺めていた。何を見るときもなく、ただ眺め続けていた。淡い青空を、何か横切って行った。燕……。雪華は、つがいらしい二羽の燕に目を遣った。おまえ達は自由なの。心の中で、雪華は問いかけた。そんなわけないわね。黄砂や豪雨にも負けず、おまえ達はここで羽を並べているのね。偉いわ。わたし達も頑張らなくちゃね。おまえ達に恥ずかしくないように。理想は理想、夢は夢。たとえ辿り着くことはなくても、一歩でも近づくように努めなければね。二度、祝福するように大きな輪を描いて、やがて燕は飛び去って行った。後には爽やかな風だけが、静まりかえった広場を吹き抜けて行った。